

賀川督明氏追悼

～一閃の光芒を残して～



賀川督明氏が召天された。2014（平成26）年9月17日午後9時32分、山梨県都留市の山荘で、61年の地上の生を終えられた。

全国的にはほとんど無名であった氏が、2008年12月13日、神戸ベイシェラトンホテルでの「共に生きる」という賀川豊彦紹介のプレゼンテーションで、いきなり脚光を浴びたのだ。共同通信社のB記者などは、「賀川豊彦の再来だ！」と叫んだほどである。それは、「賀川豊彦献身100年記念事業、神戸プロジェクト第二回実行委員会」においてのことであった。50名近くの、全国から参加者を前にして、自作のパワーポイントの画面を使っての見事なプレゼンテーションであった。

賀川豊彦という世界的巨人の孫である、背負い切れない程の運命の下に生まれて、それに背を向けるように、少・青年時代を生きてきた氏が、父純基氏の遺言に承えて、祖父の事業の継承に挺身したのである。以後の督明氏の活動は、まさに八面六臂の活動であった。それまでは、デザインプロダクションの代表として、主に東京や山梨で活動していた氏が2008年には神戸にも拠点を置いて、「献身100年記念事業」神戸プロジェクトの中心となってフル活動を始めたのである。賀川豊彦を彷彿とさせる数多くの活動・事業の中で、何よりも神戸の賀川記念館のリニューアルが特筆されるものであろう。特に、その4階のミュージアムは、督明氏のデザイナーとしての才能と経験が存分に発揮されて、氏以外では成し難い設計になっている。祖父豊彦が100年前に、この地で献身を始めた時の空間イメージを、今に再現しようとして設計したものという。この祖父にしてこの孫ありという紐帯の強さに、「自分の博物館は造るな」と言っていた豊彦も、必ず認めてくれるに違いない。

その他、賀川豊彦の協同組合事業の展開パネルの製作も重要な仕事であるし、神戸大学との持続可能性教育のコラボレーションや、九州大学研究室との中山間地における新しいコミュニティづくりの共同研究、さらには将来の水問題についての共同研究なども、これからの発展が期待される活動であった。また、各地のハンセン氏病施設への訪問も豊彦や日本社会の残した課題への取り組みであった。このように、督明氏のわずか数年の働きは、祖父豊彦の活動にも劣らぬ密度の濃いものであった。あたかも、一閃の光芒を残して天空に飛び去る彗星にも似て一。

豊彦の故郷徳島へも何度も足を運んで、祖父の事跡を訪ね、我々を励まし、支援をして下さった。あまりにも早い召天に一同深く哀悼の誠を捧げる。（田辺健二）